

## 「2023年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学工学部2年 坂下 友暉

私は将来、発展途上国の都市交通計画に建設コンサルタントとして関わることを通じて、安全で快適な都市空間の実現に貢献したいと考えている。私がこのベトナムへの短期派遣プログラムに参加することを希望したのは、交通問題が深刻な国の一つとしてしばしば取り上げられるベトナムの現在の姿を大学生のうちに自らの目で見てみたいという思いがあったからである。

まずは、ハノイの都市交通の問題に関連する内容を中心に現地での経験や学習成果について報告したい。私は以前、東南アジアの交通問題について課題研究を行った経験があり、ベトナムをはじめとする東南アジアの道路交通の状況については文献や動画等で何度も見ていたため、バイクの洪水やクラクションが絶えず鳴り続けるベトナムの道路の様子を見て大きく驚くことはなかった。しかし、現地の大学生との交流や現地滞在中での体験を通して、新たな気づきや現在の発展途上国での交通プロジェクトの課題についての知見を得ることができた。

私の得た気づきの一つとして、ハノイ中心部の現地の大学生にとって、バイクは、私が以前から考えていた以上に生活に欠かせない存在であったということがある。前半の1週間の間授業に参加した人文社会科学大学(USSH)の前の大通りには、ハノイメトロが通っているが、このプログラムに参加したUSSHの方は殆どバイクで通学しているとのことであった。USSHから旧市街への移動のためにハノイメトロを利用する機会があったが、案内してくれた学生さんの中には初めて利用するという人もいた。学生さんによるとメトロを利用する場合、駅から目的地までの間は徒歩での移動が必要となるため、大学からメトロ沿線の目的地に移動する際も、バイクを利用することが多いそうだ。現地の歩道はバイクの車道と化していたり、駐輪されているバイクや出店で塞がれていたりするためか、私が渡航前に考えていた以上に、現地の人々は歩くことに抵抗感があるように感じられ、ハノイでは思っていた以上にバイクによる「ドア to ドア」の移動形態が根付いていると感じた。また、外国語大学(ULIS)の前には数ヶ月後ハノイメトロの新線が開業することになっているが、このこともあまり認知されていなかったことも印象に残った。

ハノイメトロやバス、BRTなどの公共交通機関はその建設にあたり日本やフランス、中国などの国々が支援していることもあり、設備面では日本の公共交通と遜色ないほど比較的しっかりしているように感じた。しかし、前述のような状況を考えると、ソフト面での社会的運用の仕方に課題があり、バイクや自家用車の代替交通として公共交通を人々の生活に根ざした交通手段として利用してもらうためには、都市鉄道、バス、バイクや自家用車など、あらゆる交通の総合的なマネジメントが求められていると感じた。この分野は土木工学の一分野である土木計画学の領域であり、私の将来的な専門分野でもある。私は次年度より3回生となり、公共経済学や社会基盤計画のための方法論やその立案・評価のための分析手法などについて深く学んでいく。今回のベトナムハノイ滞在を通して、その土木計画分野の重要性を再認識させられるとともに、土木工学が社会に大きく貢献できる学問分野であることを実感させられ、今後の学習意欲にもつながったと考えている。今後も以前からの目標実現のために日々の学習に精力的に取り組んでいきたい。

以上が交通工学的な視点からの成果報告であるが、USSH、ULISでは、ベトナムの地理・歴史・政治制度、ベトナム語、日本文化の研究成果に関する講義など、幅広い分野の講義を受講した他、日本語の授業を見学した。

地理・歴史・政治制度の講義では、ベトナムの南北の違いや植民地支配の歴史、社会主義特有の政治システムなどについて新たな知識をつけることができた。また、これらの授業によって、放課後や週末の観光や散策の際に様々な発見を得ることができたと考えている。例えば、ハノイ市内の各地で見られた、昔ながらの建物にはアジアらしさが溢れていながらも、植民地支配時代のフランスの影響を受けた、どこか西洋らしさを感じさせる建

物であるようにも感じられた。このように、ハノイの街並みには授業で学習したようなベトナムの歴史が反映されており、非常に興味深いと感じた。また、過去の経緯から南北で文化に違いがあることや、南北で気候が異なっていることから、ベトナム内でも南北では住居や都市空間には何らかの違いがあると考えられる。次回ベトナムを訪問する際には、フエやホーチミンシティなども訪問し、地域間の違いについても自身の目で見てみたいと考えた。また、私の所属する学科には留学生も多く所属しており、東南アジア出身の友人も複数人いる。今改めて振り返ると、彼らの母国についての話をすることはあまりなかった、これからは彼らから東南アジアの国々についてさまざまな話を聞き、ベトナム以外の東南アジアの国々についても留学や個人的な旅行で訪問してみたいと考えた。

ベトナム語の授業では、基本的な挨拶や日常会話の表現を中心に学習した。ベトナム語には漢越語と呼ばれる、漢字由来で日本語の熟語と似た発音のベトナム語の単語もあり、この点が非常に興味深いと思った。ベトナム語は用言の活用がない分、習得は比較的容易であるのではないかと予測していたが、発音が非常に難しく、簡単な単語でも全く通じない場面が多々あった。事前学習と現地でのベトナム語の講義では日常会話が成立するほどのベトナム語を身につけることはできなかったが、ベトナム語の全体像を理解することができ、ベトナム文化を理解する上で非常に有効な活動となったと考えている。

日本文化研究の成果発表の講義では、外国人の日本文化研究者による講義を聴講し、日本語の授業では、現地の学生の日本語の授業を見学した。前者の講義では、今、日本文化のどのような側面が外国人研究者に注目されているのか、どのような研究がなされているのかについて知ることができた。また、日本語の授業について、我々日本人が中学校で学習する国文法のように、現地の学生も品詞に着目して用言とそれらの活用形を覚えていく形式であると想像していた。しかし、実際は日本人が英語を学習する時のように「～だそうだ」など、構文を順に学習していくようである。このようにいずれの授業でも日本文化や日本語について見つめ直す契機になったと感じた。

最後に、ベトナム滞在中には現地の大学の学生さんには授業中の学習をサポートしてもらったり、たくさんのベトナム料理のお店や観光地に連れて行ってもらうたりとたくさんのおもてなしを受けた。そこでの体験や現地の学生との会話の中で得た発見も非常に大きかった。帰国後も多くの学生さんとSNS上でやり取りは続けており、今後も今回の留学プログラムでできたつながりは大切に生きていきたい。また、彼ら彼女らが留学や就職で来日した際には恩返しの意味でも、できる限りのおもてなしを提供したいと強く思った。さらに、実際に現地でお世話になった方々に限らず、日本を訪れる留学生に対しても、日本での滞在が有意義なものとなるように何らかの形で支援を提供できればと考えている。

最後になってしまったが、本プログラム中に我々をサポートしてくださった、USSH・ULISの方々、京大の職員の方々など、本プログラムに関係するすべての方々に感謝申し上げます。